



一冊四卷

中村俊定
演
紀逸編

中村俊定文庫

文庫 18

282





早子朝



初るやあひまはる

紀逸

多訓早

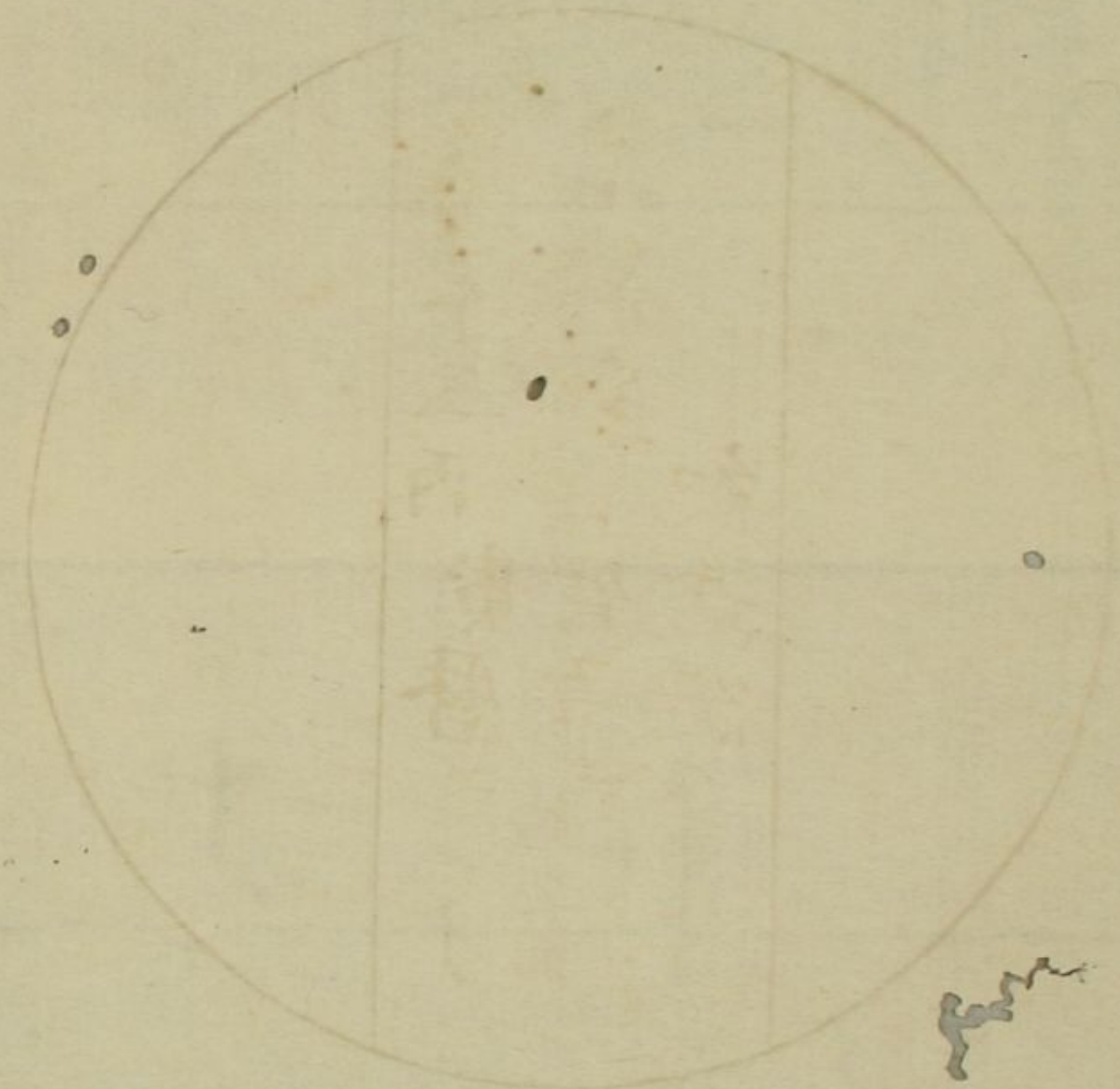
よん事一ニ川

春潮

之りの暇

系さくく咲き結乃礎月

庵



其二

双六やお根もさくく 碓月

花の妻

うけりふ 寝み

紀逸

色に腐の根

高し 柏子をよふうん

春潮

よふつさく

其三

繡や旭しつ川と 春潮

玉の妻

さつやさくふ 碓月

知りしち

生酔らぬさくさく

紀逸

さくさく

正朔

難波津をきりぬるもよもや橋と橋

敬之

破戸よりさるん子も冬節月

扇下

日の丸乃扇も風やさるるん

逸九

引明とむさしりうり園の春

逸九

そ刀折減も蝶の羽も糸

橋下

柳新更へまねれは華もく

斜明

喰積や雪虫の上名松の風

斜明

子代もらば代と茶乃試

杏園

猫の意屋もぬ竿も悟り也て

紀翠平

常より和時より希ふと朝の暮

紀翠平

橋脚も門乃定紋

逸九

まうしとくくくもくもくも

紀堤

もこ極や禿り掛く門の春

紀堤

柳の腰乃掛も多返

敬之

此の声からけと輝と呼吸して

沙明

もくもくやあ柳り下やも乃春

沙明

翠の章歌も落さきのこと

紀堤

羨入り子たの顔と見え遠る

杏園

鶯の鳴くあはれは戸の先春きらぬ 杏園

年ど蜜柑四角八角 沙明

暗くならくさるゑの音乃して 扇下

何とゆや家の扇乃と夢さし 扇下

笑く一先いささ葉の山 斜明

遠眼鏡海苔わらぬよつと身をまて 橋下

一天尔去子ののねし 冥乃春 橋下

立とをりくくぬし 万葉 紀羽平

世感の生美の西と山葵や 詠之

聖帝

去年とて人を山をや後 田社

扇もこの子と清く 橋扇 茶外

春の月二の三日いん 杜谷

鶴書さあま拾ん日のく 杜谷

七又三月福く 乃上 稻町

担板く柳の匂く斜明 吐綾

笑ふ子のよそがさく 苑の春 吐綾

わくと笑くさるく 声 市栖

いろは花先いのちや 人 浙江

えりや書も少く

巾

浙江

書上下く居る

食積

作尾

令山の恙より年やうらん

茶外

古き日の双紙はひや

巾曆

茶外

止齒乃ホゆつり葉の生い解るらん

虎夫

荳の子綿の中

敬中

オムと折く異や梅の心

敬中

い孫はむ人う迦文の云

市宝

け甚も鶴の夢すくねひゆく

管子

おらの若く暮るや江戸の甚

荳子

よ掛くけふ向ふ萬圓

母主

八重とあそむる八重のと書とをゆく

連尺

曆中も文あはるより梅の心

連尺

味あはるはつち代のも草

田社

庭中の揺ひあは

紀岡

そよ風の志る

紀岡

孫子あはる

杜谷

初年う渡りのあはる

母主

神子達ふ従方ありり家の妻

母主

奥の鱗形ふ名の正月

吐綾

泉水水流るるききも毎々ゆく

虎丈

元日や年々月日も切く之を

虎丈

時直新いき屠蘇乃高

浙江

若緑指の先おとかいゆく事

紀屋

梅さくやまのふい去まぬ白

紀屋

喜と行よの百福壽草

敬中

蜂の巣く亭のあ借りりそ

存尾

屋深し楳の下とび幾の花

作瓦

暖く續く鈴葉すし一紙

萱子

一とより紙とて掃やむしん

市栖

平河や匂い厚き梅のそ

市栖

大帝冠者の初雪の三寸

連尺

麻猿あると奴とてき、やしく

稻町

年々門や町々二筋松の風

稻町

面の陰臭乃るるも瑞

紀屋

版帖のそよみかくる

市宝

音也

初雪や水改りく日の夏加

市室

恒連吹とくる風の初るき

紀田

芦灰の初く初葉や新芽しん

田社

改正

初鷄いりたよと云く初へ

鳥雲

仲いりる歯栗のこも上

珪和

二の皆多ふの雨と名懐成ゆく

冠子

七種い子代招小木の突部く角

冠子

いぬきの好きかきりのひき

逸秋

鹿馬ひ瓢とるると陰たたく

流螢

命と又いりるいりるいりる

流螢

いりるいりるいりるいりる

紀貢

手振釣ふも燕衣の春としく

梅留

福もや慶計同く纏ふ初朝

梅留

信の書りいりるいりるいりる

禹江

傀俚師政中の角乃志平んしく

南栗

あしうのいりるいりるいりる

南栗

いりるいりるいりるいりる

鳥雲

いりるいりるいりるいりる

及北

投の子乃室懸りり富き象

及兆

生きたけけく破るるの的

流螢

高丸や白嵐や少く残るるん

禹江

福来草とくわの若し山うり

禹江

二三投やと續るるの夢

冠子

赤原の石と万早舟の名乃わくく

紀貢

え日尔翁のこや荒蕪の声

紀貢

右の枝へ這入るうら衆

梅留

お幕の紅粉径の死るるれく

逸秋

鶉とくくび人形一今朝の去

逸秋

きここの睦月むのま

南栗

きつけり立や巨燈と余不所て

珪和

今朝のまの鳥の網やま乃海

珪和

名代り成し門套のま新

友兆

蝶ももぬらるるまらまらまら

鳥雲

青陽

蟹汁抱これ母も伊智の初夜

獅三

雑芸の上をワケ

逸己

傀儡師肘乃も母く振子あく

里先

初鷄や星の光乃潮ささむ
庭火のりりや庭子にぬき
梅の葉撰来乃枝の二本やそく
里先 富章 長訂

東雲と一ツもぬきく明乃春
船系より先も寝乃寝ん
桂活の芽乃暗句ハ一き出寄中
長訂 楚人 買秋

元りや美少く存るま婦中
夢と實人の夢ある初夜
分がりて百ふるやと較わりて
買秋 巨夫 梅抄

くく白やつるも寝ぬき心風
系鞠かきふ事初の景
佩系やふいより好月おく
梅抄 獅三 杵狄

庭とハ神のまき路やと朝の雲
拍子ニツ神々やう白
版粒う柳のまゆやと暮りしん
杵狄 里先 逸已

末廣きあつて七若一 鏡草
はぬ立人もあき日の秋
毛遣り世乃暖の危るあめ
逸已 長訂 香雨

皆人余未ひらけり 福寿草 香雨
硯の年も 若き 隅 柳 賞秋
まゆさる鳥 新ふ世を 中と内よ 楚人

食好ふは けしあふ一人 神楽 楚人
先願 友うらむ 籠 賣 杵狄
梅 植 蔓 桂の 花 幸 少り 分て 巨丈

八重の 雁 鶯の けし 春は 布き けり 巨丈
借し けし けし けし けし 梅 紗
出 柘子と 吹ぬく 風も 也 深き 富章

菖蒲 葉 實も 飾り 梅の 花 富章
倭 後 表も 春も 神 空 香雨
貝 負す 風 尔 障子 せ ぬ 獅 三

春 入り けし けし けし 柳 帆 舟 亀 文
先 春 ぬ 春と 天 云 春 水 人
繩 巻 けし けし けし けし 許 人

又一ツ 魚と 二ツ けし けし けし 水 人
穂 長の けし けし けし 許 人
春の 春 ぬ 春 ぬ 春 ぬ 亀 文

門く名松風若し今朝の去

許人

うねるまゝにそよぐ連の糸は

亀文

うまぬ日を佐保姫の結末に

水人

多陽

年徳の早う来りうりや言柳

水語

うさおのけり夜の管後

紀準

けまも小山さうう鳴り

金幣

鳥帽子あまの鏡ふ今日やまの去

子璉

曆の文字乃たふ三元

金幣

結い事とまゝにそよぐの鳴り

紀準

福もくや鶴の足まぬり

紀準

ぬもさうあまのけり

水語

柳やと鼓の重り舌出

子璉

壯

伝のわや田鶴うらまの春

金幣

せんくゝ合招き多りま松

子璉

出井の作父の産も引く

水語

聖帝

人もふと笑顔

志熙

うらやまやかく笑

東君

早来乃咲之顔

桃笠

うらやまのま

梅曆

年くのうれしき

礎月

好やひんのみ

元旦

難波の御うしとま宮乃ま 李冠

射物詰りや武士の日登

紀逸

吹ひり竹も去月の音も

詩人

梅咲く裾の匂ひや露のほろ 万母

口まの草葉入の供

紀逸

門松のりも父母よりまの春 ^女 秋下

まの川芽也とつとゆ極

紀逸

破くらやまのこ三人 男止 止談

鏡のり一芥の丁こ

紀逸

鶏旦

法中しけ起るもあしみの基 敬和

童と捨れはる水の玉 紀逸

草くさる涼もさきや松うらむ 菌生

白く草の色もまじゆ 紀逸

何ためくや庭や四方の朝言ふ 風謡

右神口く善のまじゆ 紀逸

初朝やア波へ死る花の声 雲梅館 三松

掃く草も百姓の吸口 紀逸

仕方ケはる掃く草や平の口 琴々

朝日志門く草葉の碓 紀逸

一寸の穂くちや梅の花 溜雲

草くちい草の神々草の折歌 紀逸

秋く風を掃ふや草の梅 権水

草の草折り解の草 吟 紀逸

新平一の初日草く編編み 遠保

瑞心く草くつ草 紀逸

佐保形やぬゆく其のあやとり 紀史

うらのねもふきりし車 紀逸

下名ゆき去の日の音もあや年の鈴 紀鶴

ふりけの聲斗も永き日乃鈴 紀逸

きくともきくひやうぬり花の去 紀旦

和日の鏡 去下 一 和 紀逸

うきききく朝の音や 玉の春 遠女

うきききく松ふけの 音あき 紀逸

松風のいさじや行く 雲の去 露斗

年乃渡 八百日ゆく 濱 紀逸

きききあやゆーく 足ぬゆきと 吟 五竹茶

こ下 松交も 松の 音居 紀逸

梅の香やあらとさあるゆよ水 梅雅

松も並よさ 十戸方の音 紀逸

ゆりゆり梅の音ありの 男髪 梅見

柄も崩ききり 自ら 和草 紀逸

丰朝

初雪の掃、あは、塵や、星一ツ、甄扇
糸、拵ふ、む、ふ、危、多、の、息、
紀逸

さ、く、く、り、先、う、向、あ、や、花、の、春、山、長

同、花、と、惜、ふ、ふ、も、草、摘、川、
紀逸

迎春吉郷

齒、固、く、並、ん、く、母、の、笑、白、く、分、
桐、陰

音、の、尾、振、の、せ、く、く、裏、心、
紀逸

紅、梅、や、ユ、に、顔、か、く、こ、す、佳、利、志、靜

桐、柳、と、席、を、
紀逸

今、何、の、居、の、門、か、い、く、初、く、又、屏、の、
連、也、い、く、交、り、と、移、り、く

ふ、も、又、匂、か、度、好、や、初、日、の、冬、
逸、声

去、の、の、市、尔、賞、け、る、友、
紀逸

留、士、ま、に、ゆ、り、先、く、お、り、尔、
居、邑

ひ、り、ま、し、月、の、異、布、く、山、楸、
紀逸

何、玉、も、松、の、匂、い、や、門、の、表、
逸、十

梅、子、や、雛、さ、ふ、ひ、さ、
逸、郊

元、り、々、氷、く、う、り、
逸、夏

歌仙

強技も此方名草より沖の毒 李冠

暮いより川の暮きほしより 万舟

風の糸やの言さを紡ぎあへ 素笠

人のかゝる橋と乃 紀風

月のらなくたりやと実志あり 和川

あゝ〜〜〜葉のま〜白ふこ 紀碩

夜々鳴く楓の病る〜れ葉 詩人

かきと〜〜〜帯の〜〜〜氣 花邑

お〜〜〜〜忘を離れ〜〜〜握返り 蘭袖

さ〜〜〜〜や〜〜〜形〜〜〜竹 些文

首節尔え氣のほ〜〜〜ひあ〜〜〜終 逸亭

あ〜〜〜〜ら〜〜〜も〜〜〜羊履〜〜〜角 素笠

草柄尔念の入さ 柄袋 紀風

指負のお茶湯歩実さ 和川

灯火尔透るの風乃〜〜〜りりし 李冠

う〜〜〜〜馬〜〜〜夢の〜〜〜ふ 小男 紀積

六々〜〜〜葉〜〜〜飯〜〜〜の〜〜〜う〜〜〜り合 万舟

月も〜〜〜れ〜〜〜か〜〜〜と〜〜〜ま〜〜〜さ〜〜〜夕〜〜〜暮 詩人

羽子板〜〜〜ろ〜〜〜り〜〜〜と〜〜〜響の〜〜〜れ〜〜〜を〜〜〜れ 蘭袖

顔の赤いと知〜〜〜く〜〜〜下〜〜〜戸〜〜〜分 花邑

吹抜る櫻も〜〜〜ち〜〜〜〜る 松の風 素笠

海よのち〜〜〜い〜〜〜め〜〜〜ら〜〜〜加〜〜〜るの〜〜〜戸 逸亭

傍正の衣より〜〜〜日の入 紀碩

仕旦のよ〜〜〜い〜〜〜小〜〜〜さ〜〜〜屋の 廊 李冠

雪もくく葉のまるとらるる為氷 些文
 元舟の茶を世よ 古 舟 純風
 ちりくくは戸くく地煮たり 来 万母
 花苑のま枕のま摺へ 許人
 落る月と捨く 宿の月 孝冠
 湯去の糸川着戸の芋汁 逸亭
 海入乃るまのつあ 秋 裕 素笠
 新鳥紙も品くまの町 紀 碩
 吟やれ 揚枝の生る 立まら 和川
 先組板の音乃 ぬら 些文
 茶の露くくまの無る林の恩 紀 逸
 枕も柳をむまら 恒連 枕 筆

立巻

ちり梅のまけく鳴り 子代のま 素吟
 松竹風ふ下馬の毎火 紀 逸
 春夜くく氷押さく 木 髪
 浪峰くくまとひく 未 丸
 人のまもまらけり 富士のま 未 丸
 岐の初日く 綱の川物 紀 逸
 赤石の咲くや 月や富士の春 白 泉
 三條の松く 續く 門 巻 紀 逸
 賞和や賞はく 市の巻は 巻 紀 逸
 晚谷

神酒の口ももき松竹

紀逸

春興

言ふ夢りけり梅の花は敬亭

後よもりけり春の巻垣 紀逸

望みよん春をさきて神の梅 羅綾

寄信を花の三乃捨身く 紀逸

詠春日和歌

信よりの松り朝日乃木のくそ 野上

玉は雪の春のくそ

こえ

かきまき年とほふやこつの妻 不並

新しき物りえりや今朝の妻

玉斗

鶏旦一折

声もくし種も産も今朝の春 莫傘

初ゆりゆり名も山の子 紀逸

僂佷師の相も多座の住居もく 珪羅

若い隣ハ白心也 指子 野添

牛の尾り風もさるは二月月 桃水

秋のまきこのうすき 鶏旦 川夕

賞時り神の入魚もや節も 紀

神もを洗ふ水のぬわの 莫

まこの海も方工の旗もく 野

菊いと戸乃下戸もきり也 桃

あやめくは新うす水一輪のま
せき入とを免わしう
又くも塵吸ふ玉の胃より
猿とまはるい舞のほより
節遠よ第の切る 東山
虹も獲りまう子 月
寝くよ花起きまふ乃存
あけはさるる層のえはり

春詞

空雨も今う新とぬく細日
かきくも心いあし一年の春
初よりや雪も志門をく鶯の声

川 瑠 川 莫 珪 紀 桃 野

來松 木司 若川

改暦は未梅と吟

梅子の梅うけたるさふ乃事
子福者の向ふ清や宮の梅
万代もまねわく梅の舞い
清鏡より梅の花うく初日
非風もまうく吹や梅の
梅咲く社をふとありり
春もくりりいあしは産よせよ神の梅

免水 花郷 義順 義栄 扇風 遂宜 伯舟

一昔より梅のややく初日
花並よあしき梅乃答うれ
うらみ寸も花をふ皮や梅のま

和牛 逸声 催種

虎の戸乃室はくしや雲りり
さも華んくわくさ ねりり如
虫和和祝の先乃 福寿草
梅の香の襟袖口や志んほめ
紀草

氷花

雀舟も白の歯をくさすのさ
梅やう冬之恩あり梅の花
尋しとさ毒のさうさや届けぬ
梅さくや今朝お向の細い片に
難多の跡と寝たり梅の垣
葩と炎妻の汁ちくせし梅の花
まもり子と梅の香るるよ居小
寿夕
不並
和船
危十

年朝 表八章

ゆしとくともく向くし味慶子
梅の香くく世の中ハ梅
往柳の豫繁とさうく梅
仲もたふく船の遊ん
大の子乃年尔巴の跡 舟く
今度の危く富きあり也
よいけりや丸くくさう十三夜
焚く多く金一遊心院の露
和氷
翻采
波星
玉志
鶏屋
梅舟
梶葉
執毫

梅
かてんしとくもささる津の梅
寒泉
歯香
あつ香る風とにき一朔 降

よの梅の鼻へ香るや沖亦堂
 青岫の沖垣より梅の花
 日ぬりも泊る宿あり梅の玉
 残る香りと花より毒の花
 有人の居り坐るや毒の花
 立つきくまや毒の花乃袖
 是はくまふとく梅乃匂ひを
 松梅乃竹より賢一沖の玉
 沖平位と云くや梅乃毒
 梅さくや毒と忘れを今もこの
 鶯の声不のくくと 初も水
 若松や尾ぬと代く乃脚抱

仙景 長斜 水巴 一調 凍蝶 白芳 泉漣 和川 巴山 此友 既舟 旧菓

雲のねも梅の照るまおるを
 出まや如己年の習方より
 初めをよ宝物あり花の毒
 向合物皆さる一子の如
 春乃春虫城の鴨乃巴の句
 元日や淫り男 雛と のひ
 悪き毒印くく扇の末度一
 立久る毒さるるや年の如
 破戸より乃法も言や手乃如
 折る日や毒さるる今如の毒
 若の子ハ年乃りはや玉の春

泡氷 其時雨 逸鬼 南壽 翠夕 周山 線柳 貫村 漸然 燕谿

和宮の位を増す子の駕帽子ハ
 喜勇
 和宮の位を増す子の駕帽子ハ
 喜勇
 名をよき人の法をまやうしめ
 逸社
 二をいめい古振て吟り難考多
 紀仰
 齋神と梅尔自り也 世の春
 船蛙扇
 松う枝マ息うかを信る春の春
 逸貢
 えりや扇の獨と 裁をり
 野添
 吟娘マ見 海ふと 掌
 圭沙
 和日の世師もいぬ一迎くは
 丘臥
 掌一 世師の梅り 咲拵
 竜配
 妻乃娘とつ門々々 難考多
 樂水
 をりり一 座名の六つむの妻
 扇羅

年報

和宮とくく去のるけや年の報
 旭向庵 紀幸

亭く吟り化難み 妻
 紀逸

去くくと夜はゆとり梅の妻 時人
 紀逸

鳥の先へ去るうらみ
 紀逸

ゆくゆくをけり末代の妻 仙華
 紀逸

宮実媛もくさるや 紀逸

去く梅の林り仕らんぬのそ 紀榮

橋の柳子乃サ女 組板 紀逸

つらさ

寛政のころのよゆゆと若菜の雨夕

光のけけさ小令 小令 紀逸

あつちをかいあつちをよき若菜川舟

あつちをかいあつちをよき若菜川舟 紀逸

比日いささききりひく若菜の光車

比日いささききりひく若菜の光車 紀逸

船のふはへ知れや若菜橋 來松

船のふはへ知れや若菜橋 來松 紀逸

けさのどろいけくも若菜の巻紗

けさのどろいけくも若菜の巻紗 紀逸

かゆれの袖下白く若菜の竹塙

かゆれの袖下白く若菜の竹塙 紀逸

あつちをかいあつちをよき若菜梅詔

あつちをかいあつちをよき若菜梅詔 紀逸

其引

これ一さつ目知りあつちをよき若菜樹徳

相公 淵光 樹徳

年の暮 孤身一ト乃チ新く由

亀命

奉納梅

神梅や一花咲けく空のまら
まじ香も 寒もすのらり 石のえ
まや 咲いた先吹触の事さう先
岩も志さう 待まの 花さうり
紅白のまじり 包ひや梅の宮
いくよ 終川色 春も 妙り 神の梅
春もさうさう 空し 下段 夢の毒
中と 春の 腰を 帯りり 梅 梅 梅
平川り 裁り 夢の 夢の 夢の 夢
とさうさう 何と 何と 何と 梅の 咲

百雨 花扇 之江 藤葉 連志 壽國 嬰兒 今之 鳥曉 羽白

梅之吟

梅の年の暮と 越くとも 夢乃 不 湖東
石の路に 画も 梅 夢 草
鳴ふ人の 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢

紀逸 水語

夢の社

春り 春り 春り 春り 春り 春り 春り
咲く梅の 日向 日向 日向 日向 日向
お教り 向ひ 命り 命り 命り 命り 命り
史年乃 史年乃 史年乃 史年乃 史年乃 史年乃

紀逸 田社 水語

関者細合連

一ツ梅も 咲くく 咲くく 咲くく 咲くく
根の ありく 門や 夢乃 乃 乃 乃

紀言 逸峰

よもろき道の分まや梅の花
あつ梅や墨彦分れしうら
をとりしれ路一能や毒の星
よ乃とく枝の多きよ非乃毒
年くくあつ梅のまりく自
横あゆ風の上彦や梅のま
梅う香や日向れま伏 紀
おゆ風の上彦あ梅の花 紀
毒り香のりま彦法代や松の危 紀
行

梅 紀貫
同関者

年河や梅も都下毒乃ま
梅う香より彦のまん 西
毒彦と人よつんまや臥毫梅 以
毒彦と眼くや毒も一うぬく 三
しん経のりやれり毒母の花 朝
車井へ境も向やひあのをれ 竹
物一毎くま路終しと都のま 涼
一螢 三巴
同元下 蘗堤

あつ梅やけ非垣の都りけ
ふみまの内をいこりや毒乃毒
梅咲や乙女り顔はそるりも
投入り毒の路もや二度の魁
希原
文樓
喜彦
阿難

庭をくわゆる夜の花
折流く指を
双六で遊こちやくこ梅の
並くちねりマ休と
まる日

同
杜士
麴車
臘月
遊慶

吾の容人梅うろ
香遊ハマ鶴う
あうらうの
言の
中川乃水もぬ
折玉の花ハ
並く並んく

龜音
拾舟
盛府
園枝
栢車
湛水
紀芳

年玉マ
鶴マ白
子代八千代
玄地やの
書初マ
元りや梅も
互妻

五株
五蝶
路學
路風
木良
尔町

一さげ
けりり
松うり

越中州
文中
素文

松の
中乃
松の

山王
瓶棗
鞞答

とも降や控け上の池さくら
 紅梅や少あやしくもくもく
 双六のえ目と毒乃 菖白
 中り梅々下ハ敷乃清均好
 末度一扇の信也 富士の妻
 才ホコトハ二又もあがり屠蘇の酒
 中り毒や色とくくゆり孝純節
 一つもけんと掛ん エツ乃新
 去年毒の敷の被あり時の妻
 梅々香しとさるれ毒をぐりあのみ
 片枝ハ朽くもひらく沖の梅
 毒々毒のいよくゆり一道の妻
 昌壽

物さくらりり梅も聖地の難者ハ
 船起の鼻乃清りや毒の花
 進推

新妻

あくくくく忘之とるや毒の妻
 元日のまじり定まる中妻う菊
 松竹マ子室の糸も 宣乃妻
 新しき母のむらひマのーえん奴
 毒乃より富士も毒あやめのみ
 幾年も毒い清りん知もり
 毒入の毒動くくマ毒乃妻
 波山
 紀扇
 文水
 逸色
 愚溪
 躍耳
 疎影

早妻因
 松さくらりり毒も位り一沖の柳
 上京七日市
 釣浦

清境の地花路や早稲言ふ
鱈鱈と師走去るはや晴敵
こも傍の門を漲らや帝、本
舟きりひの氏も暮れ一、大
年の暮る魂あふ世を思ふ
京町のまろも七、年の明り
帝も去りやとのまろも連を
あふのまろ乃そ一、まろも
小娘の琴も和らぐ年忘れ
輝けし心をまろく十三夜
草居の嬉掃と一、彌也汁
海山の埃も雪一、月の市

亀及
桂十
折居
沾耕
笠澤
其樹
故一
逸声
巴船
且調
志靜
月山

まろけを度むも市一年の山
ふの清のまろも同ふ、師走く
まろもれ為帽子の終る床入り
うりまろも梅の香もあり年の言
万のまろも懐合をや、まろも
梅の清の細末を一、年のめら
餅搗や柳も花のむらもひら
まろ人もまろも清く、まろも
大黒とぬまろも、市の日
まろもけのまろも、まろも
小判もぬまろも、市の日
月もまろも、月の東居

流我
露計
渭雲
菽下
慈谿
玉調
翠雨
紙船
相葉
逸兔
逸社
丹志

松之竹等 翠鳥 雁 雁 雁 雁
 万葉の妻 待鳥 鳥 鳥 鳥
 石性の言 鳥 鳥 鳥 鳥
 松之竹等 鳥 鳥 鳥 鳥
 中より 仙臺 鳥 鳥 鳥 鳥
 孫よ子よ 鳥 鳥 鳥 鳥
 慈れり 年を おく 鳥 鳥 鳥 鳥
 みより 子の 抱 鳥 鳥 鳥 鳥
 うけ 望の 茶 鳥 鳥 鳥 鳥
 行り 鳥 梅の 下 鳥 鳥 鳥 鳥
 松々 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥

文十 鳥傘 桃水 眞山 東女 眞川 竹動 路考 仙鳥 波道 園枝

柳 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥
 格 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥
 下 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥
 扇 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥
 年 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥
 彼 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥
 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥
 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥
 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥

木鶏 路境 富旭 考几 訥子 執翁 渾人 羽搖 羽卒 梅論 眞山 伐柯

貴なるこの飛乃尾の啼き止
 嘆息しけ又貴翁や年の市
 無乞一竹田も年のまらまら
 雛形もあつらの候や年の久
 年の時盡くよりや 繁 波
 どのつと歌のうゝを年の時
 浅漬や子の今宵は梅より翁
 翁のまもく行きおあり年の夏
 りくまらうり物くもくや子の夏
 馬帽子屋の風呂もあつり年の夏
 一平毎う一回しりく子のくれ
 夏のまらうり物くもくや子の橋

良峰 長風 紀邦 仙輦 波山 紀貫 敬胃 楓夕 時人 拾翠 紀扇 千町

篠拂は挑灯より物あそび
 伝くまらうり物くもくや子の時
 又年の賞宝やまらや年の市
 松井のいとくまらや年の夏舟
 富士筑時中あつりや年の梅
 すまらこの中や師走のかまら
 少や子の年の純乃 師走く水
 大年のや丸庭にくも 冬く
 夏舟や入日も赤まらく
 梅々枝もまらと活るく蒼く水
 入あり白白味あり年の鐘
 能言とくまら深まらく年の橋

車葉 栢庭 笠翁 十町 小長 三夕 寛子 潤理 逸長 緑柳 貫村 周二

はくくくと年々言りり隣の言
いりの尾乃言くくし言言ぬ
方思の代言も言る 師を言る
言つら言や年の言の言の言りり
言りり言言言言言の言りり
晦目とととととと梅の言言言
年の言乃言言りりり 大晦日
言時も言言言言言 三十五
年の言乃言言言言言の一言
言言言言言言言言言言言
言言言言言言言言言言言
言言言言言言言言言言言

不並 玉斗 逸十 東桃 秀巴 沾吏 十圃 魚貞 逸宇 珪外 野采 玉潤

言言言言言言の言言言言言
言の中言言年の言言言言言
言くの言言言言言言言
言言言言言言言言言言言
言言言の言言言言言言言
言言言の言言言言言言言
言言言の言言言言言言言
言言言の言言言言言言言
言言言の言言言言言言言
言言言の言言言言言言言
言言言の言言言言言言言
言言言の言言言言言言言
言言言の言言言言言言言
言言言の言言言言言言言
言言言の言言言言言言言

桐陰 樓舞 樓冠 樓秋 鯉目 雪羽 聞我 硯雨 雲塘 里峯 巴九 卷石

松笠と拾ふ人ありての市
 既中よく清く女や年の市
 由く年やあるる漢糸都し似
 十餘と子桶多寒し子の市
 又梅り知志めく好く年らぬ
 是牛も定とくく年車
 獨羅やまき川梅の芽つる
 号局年の尾上のころく腐
 ろのあもつらつら母の一夜子
 一日めもあつらつら年のうねも
 稽きみの必要家とわらう原を小
 年の形や人味ありての市
 巴 白 紀 敬 晚 鞠 湖 未 文 珪 浮 竹
 湫 曉 叟 和 谷 車 東 丸 尺 羅 木 節

心よきまの物ありての市
 般賣のりりりりりりりりりり
 袖ぬと一雨り 旅よ早言か
 子り一ツ枝も春相よ木言か
 是も昔もつらつら梅ありての市
 家座尔おのる乃言や中如言か
 梅の香も袖りあまりや中如言か
 才あるまると清くや梅のぬりりり
 年木推る中も炎庭や梅の花
 半咲も同鼻ハ春のうきさうぬ
 見つるは柳ささくや 石配
 意の納る年や 十二組
 其 漢 報 答 山 思 龜 清 翠 波 梅 室 既 每 旧 英 吟 鳥 孤 山 水 車 湛 水

ひとり子のよも暝——子のくふ
 漆子と清きちり——風の香
 陰の籠ほも年の白ひくぬ
 月と日と追清きく呼も小
 輝掃やよふぬぬ人の小獨り
 無鋼の形もせした——年の言
 振向——人のよき氣や降の言
 其良もぬねぬ出や年の時
 大黒も虎の子家——子のくを
 其ちる下の——年府中の言
 其梅や振り籠るる中ふ何日
 明の目とままと唱く——日丘臥

大豆がたは信儀年——の力為子
 遊風や三崎曆の是れく見
 船人の雷く是るや年の山
 色くくくくく物く福くくら
 年の白柳も繁くとほひりり
 字解りの口ふぬまうぬ原も
 世の人乃とぬぬありぬち安日
 其必のさく呼もも船席も
 清れり女のよあり年の言
 年の内室う難味め枝乃ま
 意味線の拂いぬあり子の言
 其——のくくや柳の仰り如

子
 鳳

沾慶
 子鳳
 沾之
 頑子
 其畦
 夜舟
 冠夕
 雪子
 省我
 逸貢
 圭沙
 丘臥
 竜葩
 東栄
 其双
 破傘
 尺波
 伊十
 其雪
 其蔦
 嶋雨
 其村
 車十
 夕扇

あやまりてや高うた年の古大根
物とあるは字もか年一舟の重
所々あつら子の物ひや年の垢
鶴鶴も尾の像いまい吹もが
あやまるとも文より年の名
異くぬきま信暁のつりもけ
早生の世も甲一や大海日
宿居とある流せりき師をけ
去年の物ひはゆや海草
け花とあるもさうらん年 乾
とわ火のうと響りや舟の必

中身書

拓風 竹泉 桐江 鶴步 如蓮 一方 文水 扇里 野深 癡狄 紀芳

赤宮の結るや電の難当い
忠孝の年とり青よつまくを
一と也の鯨乃をえりや古男
舟のりつのも念い年と情いりり
おあけのあつら年の一徳か
野もやあ末のす忽乃の忘
中り木の柱も先くむ捨くも
赤銅格しりゆら山色か
りあややあ爾岡の年と梅
舟の夜でしもあよとくむ壁の影
年ももやえ状もあ封一ぬ

盤谷 和推 存義 有依 平砂 米仲 祇丞 賈明 樓川 渭北 昔原 和專

月代のくり合もりり志
招小木の屋りけりや拾坊
振夷裁れ人の美や衣死
一子の鶴鶴之ーアけ海日
一年の種がま川ア ち安日

源年

呼もとや吟ふく蘇姑射の痛て驚く
常鹿くとなつてき呼もや鼻の下
常仙

大極

大海鷲と為る一尺を扱ふ如
年翁の冷も素やと一忘
衣死給座身一ー仗 子
木髮
石腸
角浪

幸美の岸を記いり子年忘
秋風

甲申旦 追加

え新アさうまとのゆるは連のま
ぬくうけく包み物屋や梅の花
神意白ーや梅のま月日乾
ゆり 庭をまきの白ひや神の梅
色も香も神の抱きひや梅のま
四時菴連
其白
兩峰

歳晏

うらみ寸の露も子の一おる
春潮

守歳

嶽振治の人へあき呼も
礎月

甲申書

雖時ありて苦んずるも年々の市
うらひすや一声年の年景報
とりの実書ある口占りやりり
献立あるも年々きか味をくも
まらまらとて語らばしり年々の
葩お火賣の所信いへ年々の
一日をばす日とあり年々の
代くこゝろく竹の折つよも景書
年の尾やゆりき味もの景書
石折り暦もくくくく大晦日
まき湯や世に述べらる橋懸茶

敬之 逸丸 斜明 紀翠 紀堤 沙明 杏園 扇下 橋下 田社 杜谷

向ふより水もるもわく年の書
このうらも物くく味や景書
茶外もくく味もくく味の書
大晦日くく下の かくくく
郭公何れもくく味もくく味
津持の味先と味もくく味の
ふくくく味もくく味もくく味
本くるもくく味もくく味もくく味
傳保娘の味もくく味もくく味
もくく味もくく味もくく味
よくく味もくく味もくく味
年の尾や水賣の商人橋の次

吐綾 浙江 茶外 敬中 萱子 連尺 紀田 母主 扁文 紀屋 存尾 市橋

万葉のいづれの宿も原をくも
あつきの様をたふらや清拂
年の長経子血氣の葉々を
けいせいの言も味もや大出日
一巻のしを譲りてか言ぬ
年越や梅をゆきく只一葉
手や年柳も候乃花さるぬ
産る日の介も老るや年木葉
病も居るハ 帆柱も年を
煉拂や二方の冠も過り花
磁子房もたふし位も年暮ぬ
横穿もくも鶴もも師走に

稲丁 市宝 鳥雲 冠子 流螢 梅留 南栗 及兆 尚江 逸秋 紀貢 珪和

多仙の齡をくもく年くれぬ
ゆりもく候もくも年の関
万葉の子もあつきの言も
子室の子も世活もくも言ぬ
煉拂もあつきの言も 無一葉
今もくも人のりや 衣配
國物もくも年くれぬ
新巻もくも言もくも言ぬ
年の候もくも言もくも言ぬ
近年の歩もくも言もくも言ぬ
存古の歌もくも言もくも言ぬ
人の言もくも言もくも言ぬ

獅三 里先 長訂 買秋 梅紗 杵狄 逸己 香雨 楚人 巨丈 富章 亀文

聖いしく年の宴の戸中川を水
とりらさそと候ききる 師もくは
大振葉も手と惜むむく紅葉
蝶千名を降く喜ぶ川素襖を
無とりや小粒の中乃梅のふ
年の影やれ一冬と見る人もあり

水んき

許人

水語

子璉

紀準

金幣

年尾

うさくまのきき路人の作もくは

四時菴 紀逸

大尾

後合りゆけり子や膝小魚

合時菴 巽窓

追記

大若の梅りちるや 竹のま

其風

門はさり 神のま引乃毒の花

秀吉

元日や野さくらのほくむめのそ

逸棠

庭をの喜んく向ふ梅乃まれ

東李

梅咲や松風吹自いまく

休卜

破産らもほきく一室の法

青龍

りかの喜刻漏ノ水さ自い小

北家

東李と春

はのうなきふるん世や年の市

全

望み望のそくくくえよやの時

語雲

工富奥川



四十一

